

大学院における教育？

西田正規

人文社会科学研究所教授

大学院における教育、という文章に私はなぜか脱力感を覚える。

学問や研究は、自在に羽ばたく若者的な発想や情熱がなくては存在しえないものである。そして、大学院に学ぶ学生たちは、あり余る体力や柔軟な頭脳、無謀に挑戦できる未熟と野心、あるいは不正に反発する澄んだ正義感を持った存在であってほしいと願っている。もしもそうであるのなら、一体だれが彼らを「教育」できるのだろうか。

自由な発想や情熱が原動力となる学問や研究の場に「教育」が登場してくると、開かれたイメージは後退し、硬直した思考や権威主義といった暗く中世的なイメージに覆われる。教育というものの原型が、おそらくは未熟な子供に行儀や作法などを躾けることにあるからだろう。必要なことかもしれないが、それでも子供には迷惑なこと

だ。いわんや研究は、夢中になってする大人の遊びと思いたい。そのような場に教育などという言葉は登場してほしくない。仮に、ある一定の教育が必要であるとしても、狭い世界の中で硬直している「教育」は大学院には必要がない。

世界に対する認識が、それを認識する社会の性質によって異なるのは当然である。直接的に自然に頼って生きる素朴な社会は、その生き方のままに、自然の世界に大きな関心を寄せ、自然の豊饒や再生産を強く願っているものだ。そのような日々の生活は精緻な生態学的民族科学を発達させる。それに対し、都市を中心に形成される文明社会では、都市の繁栄や利権を支えている軍事や政治、経済、技術、宗教、芸術などに大きな関心が注がれ、人文科学的民族科学は肥大するが自然への関心は失われる。古代文明以来、都市の繁栄が深刻な自然荒廃を

もたらしてきたのはそのためであろう。

すでに人類は、地球上の耕作可能な土地のほぼ全てを開墾し、さらにその土壤を、過剰な収奪や化学肥料・農薬の散布などによって急速に荒廃させている。豊かであった水産資源にも乱獲や水質汚染の影響はますます深刻であり、陸上大型動物に至っては地球的な規模においてすでにほぼ絶滅状態となっている。しかもなお人口や資源・エネルギー消費は増加の一途をたどっており、地球と人類の未来はますます不安のベールに包まれている。

自然環境との調和を図ることは、いかなる生物にとっても最重要の課題である。だが都市が支配する文明社会は、自然への無関心や敵視を助長し、また一方でそれを「大自然」と見なし、甘え放題にしてきた。自然と真剣に向き合うことを避け、自然が許容する範囲内で生きようとしてこなかった。

その結末がどうなるか、今や誰の目にも明白な現実となってきた。人類と地球の現状は、文明社会を無条件に黙認してはならないと告げている。地球の自然が文明社会を支えていることを理解しなくてはならない。そのような理解を社会や文化の側から深めてゆくことは、これからの人文学の重要な課題である。

だがそれを行うには、いわば 180 度の視

線の転換、つまり自然への無関心や無視を前提としてきた視点から、自然との調和を図る立場から人間の文化や社会、歴史を吟味してゆく視点への転換が必要である。それをするには、文明社会と自然環境との生態学的関係についての理解が必要であり、これまでの人文学の枠内でそれを行うことは不可能である。

古代的伝統を受け継いできた人文学は、自然科学とはほとんど没交渉状態であり、物事への興味の持ち方、説明の仕方、求める解答の性質までもが大きく異なっている。自然科学分野の研究者が人文学分野の研究論文を読んでも、そもそも論文としての体裁すらない、怪しげな文章としか思えないだろうし、人文学者にとっても自然科学分野の研究論文を理解するのはすこぶる困難なことだろう。

転換を進めるには、人文学分野と自然科学分野とが共同研究の実績を重ねるしかない。私が関係してきた分野では 30 年ほど前に、特定研究「考古学と自然科学」が立ち上げられ、地球科学や動植物学などの自然科学分野と考古学、歴史学などの人文学分野とが共同し、遺跡や歴史資料の研究にあたった。それを契機に、さまざまな自然科学的手法が遺跡調査に導入されるようになったのである。だが今になって考えると、これもやはりごく表面的な共同でしか

かったようである。

それを端的に感じさせたのは石器捏造事件である。日本文化の起源や歴史が他のどの国よりも古くあって欲しいというような非科学的願望がこの事件の根底にあり、それが形となって現れたと考えたからである。

非科学的動機から出発した遺跡調査は、そこでどんなに自然科学的手法が使われようと科学的研究にはならない。高性能なコンピューターを使って占いをしても科学にならないように、出発点において科学的な問い掛けがおこなわれない限り科学にはなり得ない。

そのようにして科学と人文学は出発点を共有できないまま、すれ違ってきた。しかしこのことは、大学の内部や個々の研究分野にとってはなんら問題にはならない。たとえどんなにすれ違いがあっても、そんなものだと放置しておける。だがしかし、もしも大学が、未来の地球や文明について重要な責任を担っていきたいと願うなら、これは放置できることではなくなる。人間知らずの自然科学と自然知らずの人文学とが、互いに口も聞かずに同居しているような大学が、確固とした未来へのビジョンを示せるはずはなく、学生の研究意欲を掻き立てることもできないだろうと思うからである。

現代の若者は、文明といえども地球の生

態系との調和なしに存在不可能であることを感じつつ育った第一世代と言えるだろう。そのことを教えられることなく大人になった私のような世代の人間よりも、地球の現状にはるかに敏感であるに違いない。人文学を学ぶ学生であっても、自然環境の保全やそれを破壊してきた文明社会に強い関心を向けている。人文学が自然環境への無関心や無知に立ち止まっている限り、若者たちの関心を満たすことがますます困難になるのは当然の流れである。

文系と自然系とのこの根源的と思える深い溝を埋めてゆくにも、やはり若い人の力に大きく期待するしかない。そのような若者たちに文系と理系の溝を再生産するような教育はしてはならない。あるいは、小さな個別分野でしか通用しない知識や方法、技術などを教育してはならないだろう。私たちが「教育」できることというのは、どうやらそんなことばかりのように思うのである。

地球や人類が置かれている現状を把握して、何が重要で、何が重要でない課題であるかを判断し、その上で、どのようにすればその重要課題が克服できるかを考える時である。そのようにして、未来にとって必要な知識を蓄え、理解する能力を鍛えながら成長してゆく若者の中に、新しい人文学

が芽生えることを期待する。

そのような若者の足を引っ張るような教育は決してしてはなるまい。

(にしだ まさき／生態人類学)